

聖書：使徒6：8～15

説教題：御使いの顔のように

日時：2013年9月1日

今日からしばらくステパノに焦点が当てられます。このステパノは前回、食卓のことに仕えるリーダーとして、会衆の選挙によって選ばれた7人の中の一人です。その資質として6章3節に「御霊と知恵とに満ちた評判の良い人たち」と記されましたが、ステパノは5節でも「信仰と聖霊とに満ちた人」と呼ばれていました。さらに今日の8節でも「ステパノは恵みと力とに満ち」と紹介されています。いかに彼が神の器として豊かに神から恵みを受け、それを人々に取り次ぐことのできる人であったかが示されています。そしてこの恵みと力は、その後にく、人々の間におけるすばらしい不思議なわざとするしとに關係していただいでしょう。これまで奇跡は使徒たちによって行なわれたと記されて来ましたが、ステパノにもこの賜物が与えられていたのでしょうか。ところがこの優れた神の器が、人々とぶつかり、反対を受けます。ステパノの反対者たちはステパノに議論で勝てないと知ると、他のユダヤ人たちを扇動し、偽りの証人さえも立てて、ステパノをユダヤの最高議会へ引っ張って行きます。そのステパノは次の7章で長い説教をした後、石打ちにされ、キリスト教会最初の殉教者となります。彼の名前「ステパノ」はギリシャ語で「冠」を意味しますが、彼の冠とは「最初の殉教者」という冠だったのでした。

さて、ここで生じた問題とは何だったのでしょう。9節に「ところが、いわゆるリベルテンの会堂に属する人々で、云々」と出て来ます。リベルテンとは自由にされた人々のことです。紀元前63年にローマの将軍ポンペイウスによって多くのユダヤ人が奴隷として連れて行かれましたが、その状態から解放された人たちとその子孫のことです。このリベルテンの人々は、自由の身となってエルサレムに帰って来て、そこに自分たち専用の会堂を持っていました。そこにはクレネ人、アレキサンドリア人、キリキヤやアジヤから帰って来た人たちが集まっています。彼らは外国で自分の一生が終わることを望まず、聖地エルサレムに葬られたいと願って、様々な困難を覚悟しつつも、この地に戻って来た人たちです。その人々が立ち上がって、ステパノと議論します。その問題は一体何だったのでしょう。著者ルカははっきりとは書いていませんが、リベルテンの会堂に属する人たちが訴えている言葉から、その内容を十分に知ることができます。

まず11節。「そこで、彼らはある人々をそそのかし、『私たちは彼がモーセと神とをけがすことばを語るのを聞いた』と言わせた。」これは偽りの証言ですから、そのまま受け入れることはできませんが、とにかくこの言葉をもってある人々を説き伏せることができたわけですから、ステパノの言葉には、取りようによってはモーセと神とを冒瀆するような内容が含まれていたということだけは分かります。次は13節。「そして、偽りの証人たちを立てて、こう言わせた。『この人は、この聖なる所と律法とに逆らうことばを語るのをやめません。』」ここからステパノが訴えられたのは2つの点だったことが分かります。一つはこの聖なる所すなわちエルサレム神殿に關してであり、もう一つは律法に關してということです。神殿は神の臨在を象徴する所でしたから、これに逆らう言葉を語る者は神を冒瀆していることになり、二つ目の律法はモーセによって与えられたものですから、これに逆らう者はモーセに逆らっているという彼らの主張になったのでしょう。3つ目は14節です。「『あのナザレ人イエスはこの聖

なる所をこわし、モーセが私たちに伝えた慣例を変えてしまう』と彼が言うのを、私たちは聞きました。」ここからステパノが語ったことは、イエス様ご自身の教えに沿ったものであったことが分かります。ステパノは神殿と律法に関する個人的意見を述べたのではなく、イエス・キリストご自身の教えを受けて、それを述べていたのです。

伝統的なユダヤ人からすれば、この神殿と律法は宝の中の宝です。自分たちユダヤ人の特権をはっきり示す大切なしるしです。それをいくらかでも否定し、けなすようなことを言うステパノは、許しがたい危険な存在に見えたのでしょうか。ではステパノはこれらについてどのように述べていたのでしょうか。彼の主張はイエス様の教えに基づくものですから、イエス様ご自身の教えを振り返ることによって、それを知ることができます。

まず聖なる所、エルサレム神殿についてです。ユダヤ人たちは、イエスがこの聖なる所をこわすと言っているというステパノの言葉を引用し、非難しましたが、イエス様は何と言っておられたのでしょうか。ヨハネの福音書 2 章 19～22 節：「イエスは彼らに答えて言われた。『この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。』そこで、ユダヤ人たちは言った。『この神殿は建てるのに 46 年かかりました。あなたはそれを、三日で建てるのですか。』しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。」イエス様はここでご自分が神殿をこわすとは言っていません。壊してみなさい、と言っただけです。そしてこれはイエス様の十字架の死と三日目の復活を指して言われた言葉でした。なぜイエス様のからだが「神殿」と言われているのでしょうか。それは旧約時代の人々は神に礼拝をささげるために神殿にやって来ましたが、今や人々が神に会い、神に近づいて礼拝をささげるのはイエス様においてだからです。実は旧約の神殿は、後に来るイエス様を指し示すものだったのです。マタイの福音書 12 章 6 節：「あなたがたに言いますが、ここに宮より大きな者がいるのです。」さらに聖書の教えを見て行くと、イエス・キリストが神の神殿であるばかりか、この方に結ばれる私たちも神の宮になると言われています。私たちはキリストのからだだとされた者たちであり、キリストご自身が神殿であるように、その方と結ばれている私たちも神の神殿とさせられるのです。このキリストがもたらした新しい祝福についてステパノは語ったものと思われま

す。もう一つの律法についてはどうでしょうか。ユダヤ人たちは、ステパノが、「イエスはモーセが伝えた慣例を変えようと言った」と言って非難しましたが、イエス様は何と言っておられたのでしょうか。マタイの福音書 5 章 17 節：「わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っ

てはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。」これはどういう意味でしょう。それはイエス様は私たちの救い主となるために、律法が要求すること全部を満たすために来られたということです。旧約時代に罪が赦されるためにはいけにえの血が流されなければなりません。そのことに関する様々な儀式的規程が律法に定められていました。それは罪を犯すたびに繰り返してなされなければなりません。しかしキリストは無限の価値を持つご自身のいのちを十字架上でささげることにより、1 回限りのわざで完全に私たちの罪の価を払い切り、贖ってくださいました。ですからこれによってそれまで行なわれて来た様々ないけにえの規定は不要となったのです。キリストの十字架によって今や完全に私たちの罪が赦される世界が私たちに對して開かれたのであり、かつての古い律法、モーセの慣例は、その部分で大きく変わることとなったのです。

このように旧約の神殿も、様々な儀式律法も、すべては将来のキリストを指し示すものでした。その本体が現れた以上、これまでの影は道を譲らなければなりません。ステパノはこうにして、イエス・キリストの十字架と復活による新しい祝福について語ったと考えられます。しかし目に見えるものに頼り、また自分たちの宗教的行ないに頼ろうとするユダヤ人たちは、これを受け入れませんでした。そこで彼らはステパノを追い詰め、偽証という卑怯な手を使ってでも彼を断罪しようとしたのです。かつてイエス様を死に追いやった出来事を再現するかのようにして・・。

今日最後に注目したいのは、議会に立たされた時のステパノの姿についてです。15節：「議会で席に着いていた人々はみな、ステパノに目を注いだ。すると彼の顔は御使いの顔のように見えた。」顔が輝いた人として私たちが他に思い起こすのは誰でしょうか。それはあのモーセでしょう。彼はシナイ山で主なる神にお会いし、十戒を頂いて降りて来た時に、顔の肌が光を放っていました。出エジプト記 34 章 29～30 節：「それから、モーセはシナイ山から降りて来た。モーセが山を降りて来たとき、その手に二枚のあかしの石の板を持っていた。彼は、主と話したので自分の顔のはだが光を放ったのを知らなかった。アロンとすべてのイスラエル人はモーセを見た。なんと彼の顔のはだが光を放つではないか。それで彼らは恐れて、彼に近づけなかった。」ステパノがこのモーセのように輝いていたことは何を意味するのでしょうか。それはステパノは何らモーセに逆らっていないということではないのでしょうか。人々は、ステパノはモーセの敵だと非難していましたが、そうではない。ステパノとモーセは一致している。どちらも神の輝きを放っている。神ご自身がそのことを示しておられる。

しかしこれは単に神が与えたしるしというだけではなかったでしょう。まるで御使いのような顔の輝き。これはやはり神と本当に近くある親しい交わりによって、彼に与えられた輝きだったのではないのでしょうか。モーセもそうでした。神と親しく語り、交わることを通して、モーセの顔のはだは光を放ちました。つまりこれはステパノがいかにか神と親しい交わりの中にあつたかを示すものなのです。そしてこれはやはりイエス・キリストに対する彼の信仰と切り離せないものだったでしょう。ステパノはキリストが私たちのために十字架にかかって完全な身代わりを果たしてくださったことを信じていました。またキリストによって神に受け入れられる完全な義を頂いていることを信じていました。そしてキリストにあつて大胆に神に近づき、交わる祝福に歩んでいました。この祝福に生きていたので、彼は神の御顔を仰ぎ見る御使いのような顔をしていたのです。

私たちにとってのチャレンジは、彼がどんな状況でこの顔つきをしていたのか、ということです。それは自分のいのちが取られようとしている絶体絶命の状況においてでした。反対者たちはステパノを憎み、彼に襲いかかろうとしています。しかしその時、ステパノの顔は御使いの顔のように見えた。ある人はこう言いました。「その人の本当の性質・性格は、その人が暗やみの状態に置かれた時に現れ出る」と。すべてがうまく行っている時に、私たちが明るく、笑顔で、人にも優しく、気前の良い人として生活することは比較的簡単です。しかしそうではない困難な状況に置かれた時に、あなたの本当の意味での性質・性格が現れる。苦しい状況、追い込まれた状況、危機的な状況の中で、その人がどういう人であるかが現われて来るのです。

私たちはどうでしょう。ふだん神を賛美し、立派な告白をし、クリスチャンとして歩んでいるようであるかもしれませんが。しかし思わぬ状況に投げ込まれると、突然怒りっぽい人間に変

質するということはないでしょうか。人のことなど頭に入らず、ただ自己中心的に行動し、本当に信仰に立っている人であるかどうか怪しくも思われるような人間になってしまうということはないでしょうか。

しかし今日の箇所から受けるチャレンジまた励ましは、ステパノのような信仰をもってイエス・キリストにより頼むなら、私たちも困難な状況で、危機的な状況で、御使いのような顔をもって歩むことが可能であるということです。私たちがより頼むキリストは、危急の時にもこのような平安と確信に私たちを生かしてくださるお方です。私たちがどんな状況に遭遇しても、それよりもはるかに大きな神の全きご臨在へと私たちを引き入れ、私たちを強め、慰め、固く立たせてくださるお方です。

私たちの今週の歩みにも様々な戦いがあることでしょう。イエス様はご自身に従う者には世にあつて患難があるとはっきり言われました。そこで私たちは自分をどのように現わす者でしょうか。ステパノが示してくれたことは、私たちはイエス・キリストに信頼することによって、このような祝福に生きることができるということです。目の前のどんな状況にも勝って力強い、父なる神の臨在と満たしと励ましに包まれて生きることができる。私たちがキリストへの信仰によって、この祝福にステパノのように生かされたいと思います。そして神の光を輝かせ、遣わされる場所で、このように神と共に歩むことのできる祝福を、私たちの姿を通しても宣べ伝える歩みを御前にささげてまいりたいと思います。